

[ 別紙 2 ]

## 論文審査の結果の要旨

申請者氏名 伊藤 弘

本論文は、海岸林に対する地域住民の認識や行動を、風景生成の観点から論じたものである。ある地域や集団において、人々が「もの」や「場」に愛着を感じたり、価値づけや意味づけを行ったりするうえで、人々がその「もの」や「場」を風景として認識し、それを共有しているか否かが影響すると考えられる。そこで本論文では、海岸林を対象に、実体が「集団表象としての風景」へと生成されていく風景生成モデルを設定し、地域住民の海岸林に対する行動と風景生成過程との関係について考察することを目的としている。

第1章では、既往研究の整理および用語の定義を行ない、風景生成モデルの設定を行っている。モデルは、海岸林の身近さ、海岸林構成樹種であり海岸林を想起させる働きを持つクロマツの身近さ、地域社会における海岸林の価値から構成されている。

第2章では、文献・資料調査により、社会における海岸林に対する関心の変遷について論じている。海岸林に対する関心は、時代ごとに政策等と深く関わりながら変化しており、戦前においては国民教化のツール、戦後は防災やレクリエーションの機能に関心が向けられ、その後、徐々に歴史的・文化的な側面に関心が向けられてきたことを明らかにしている。

第3章以降では、藩政時代のほぼ同じ時期から植林が開始され、社会からは常に関心をもたれてきたにも関わらず、地域住民の海岸林に対する認識や行動が異なる東北の4地域、秋田県能代および本荘、山形県庄内の川北および川南を対象とし、文献・資料調査、現地調査を通して、風景生成過程と地域住民の行動との関係について分析、考察を進めている。

そして3章では、居住地における海岸林の身近さについて比較考察している。海岸林の身近さには、意識上の身近さ、物理的な（近接性）身近さ、視覚的な身近さの各側面がある。そして、それらの身近さに関わる要因として、土地所有が官民のいずれであるか、市街地と海岸林との位置関係における近接性、市街地内の街路から海岸林を眺める視点分布の広さがあげられ、これらの要因によって身近さが左右されることを考察している。

また第4章では、当該地域の海岸林を構成し象徴的な樹種となっているクロマツ自身の身近さが風景生成に影響を与えているとして、海岸林以外の場所でのクロマツ植栽状況を調査分析し、その身近さを比較考察している。これについては意識上の身近さ、および視覚上の身近さがあり、前者は古くから地域の拠点である神社等にどの程度植栽されているか、後者は街路からのクロマツの視認性によって左右されることを考察している。

第5章では、海岸林の造成・管理主体の教材等における扱われ方、および造成・管理目的に関する地域要請との整合性から、海岸林に対する価値の形成過程を比較検討している。そして、地域における海岸林の価値は地域の実情を踏まえて管理されることで向上するこ

とを考察している。

第6章では、4地域における現在の海岸林管理の実態および課題を法制度および管理体制と活動内容から比較考察している。そして第7章では、3～5章で得られた結果を風景生成モデルに当てはめて整理し、風景生成過程における位置づけと、6章で検討した地域住民の海岸林に対する行動との関係を考察するとともに、今後の海岸林管理のあり方を論じている。

以上、本論文は、近代以降における海岸林の風景生成モデルを提示し、風景生成過程と地域住民の認識や行動との関係を明らかにするとともに、実体としての環境が地域に共有される風景となる条件について論じたものである。本論文で得られた知見は、自然環境の保全管理や地域計画に関する研究、実践に大きな影響を与えられ、学術上、応用上貢献することが少なくない。よって、審査委員一同は本論文が博士(農学)の学位論文として価値あるものと認めた。